#16

なんてことはない通勤電車の中での出逢いは、日常茶飯事に起こるアクシデントのようなのも。

ここから恋が始まることも定石である。

僕に関しては、結婚もしているしサヤカのことも愛しているからそんなアクシデントに遭遇しても全く関係がない。

しかしあれ以来、彼女とは不思議と毎朝会釈を交わすようになった。

お互い毎日、同じ車両の同じ席に座ること二年くらいなるのだろうか。

話なんてしたことはないが、二年間も毎朝顔を合わせていればまるで二年来の友人であるかのような錯覚に陥る。

だからあの日がきっかけで、お互いに感じている錯覚が少しだけリアリティを増したのだろう。

正直なところ、僕は彼女のことを少しだけ意識し始めているようだった。といっても、恋愛感情とかではなく、単なる興味を持ったといった方が的を得ている。

だから、彼女が下車する駅はどこかを確認するために、いつもはうたた寝しているところをわざわざ起きていたり、服装や髪型を毎朝チェックしたりする。

そんな時にも、やはり彼女と目が合うときがあるが、恐らく彼女も興味本位で僕の服装等についてチェックを入れているのだろう。
それほど、通勤電車の中は退屈なのだ。

#17

十八歳の頃、教室で寛いでいると友人が近づいてきて僕に言った。
「下の女の子たちがお前のこと見て、『あれ誰やろうか』とか言ってたぞ」
季節は二月の初めだった。
間もなくバレンタインという儀式がやってくる。
僕は自慢じゃないが、本命チョコを貰ったことがない。ギターが恋人だから別にどうでもいいと思ってはいるのだが、少し寂しいというのが本音である。
僕は特別な美少年でもなければ醜男でもない。ごく普通の顔立ちをしている。
ただ、身長が百八十センチを超える細身の体型とあまりにもギターに対する思い入れが強過ぎる偏屈ギター少年であることから、気軽に人が寄ってくるようなタイプではないようだ。
自分で言うのも変だが、この辺りではかなりのテクニックを持ったギターリストということで少しは有名だったけど、バンドには入っていなかった。

本当はバンドで活動したかったけれど、僕と同レベルのメンバーと巡り会うことができなかったのだ。
妥協してちょっとヘタクソでもいいから、面白可笑しくバンド活動するなんていうのは無理な話だった。
それだけ僕はギターが好きで練習も沢山したし、プライドも持っていた。
でも彼女がいないのは、年頃の少年にとっては色々な意味で満たされていない。
だからといってそんなに好きでもない女の子とつきあうなんて僕には時間の無駄としか思えなかった。
何故、十代そこそこの僕はそこまで意地になるのか。
それは当時、ある夢を見たことがきっかけとなる。
当時人気の女性ポップス歌手と夜の大阪をデートしている夢だった。
本当に実在する細い路地で僕たちは抱き合いキスをした。夢の中なのに僕は震えた。
それ以来、その女性歌手が好きになった。恋してしまったのである。
でも、彼女は芸能人だし僕にはどうすることもできない。
でも好きだから仕方がない。
もちろん彼女に対する性的欲求もある。
自ずと彼女の写真を見ながら摩擦行為を行ってしまう。

絶頂を迎えるとき、快感で体全体が震えた。放出する液体の量も半端ではなかった。
違うグラビアアイドルで同じ行為を行ったこともある。
快感はあるが全く及びもしない。放出量も彼女ほど多くはない。
これは一体何を意味するのか。
本当に愛する人の場合、その人との子孫を残したいために最高の快楽と多量の液体を放出する仕組みになったいると思う。だから幾度ともなく性交をすることができるわけだ。
この快感を知ってしまった以上、あまり好きではない女の子と付き合うことは無意味となるのだった。
しかし、先の友人のその言葉は僕に大きな期待を膨らませた。
バレンタインを目前に控えるこの時期に、僕のことを気にする女の子がいるということは一体何を意味するのだろうか。
学校にいるときは、それとなく意識し始めた。つまり、仕草がよそよそしくなるのだ。
もっと具体的にいうと、誰に見られている訳でもないのに、階段を上るにしても三段飛ばしで颯爽と決めてみたり、自動販売機でジュースを買うにしても変に寄りかかってボタンを押してみたり。
自分自身まんざらでもなかった。こんなことを繰り返し儀式の日を迎えた。
しかし、当日、何事も起こらなかったのだ。

#18

季節外れの台風がやってきた。中心気圧は９６５ヘクトパスカルの大型で強い台風だ。
昼過ぎから風が強くなってきている。既に暴風域に入った南九州では高波が港を襲い、強風が街を吹き抜ける。
夕方には近畿地方が暴風域に入るとのことで、会社から早めの帰宅命令が出た。
雲は多いが雨は降っていない。湿った空気を肌で感じ、高速で動く雲の流れを見ながら帰宅した。
奈良も風が強くなってきている。窓の外で木が大きく揺れるのを見ながらいつもより早めの夕食を食べていると、サヤカは困ったような顔で僕に語りかけてきた。
「最近、なんだか変な人が近所をうろついてるんですって」
正直、僕はドキッとした。僕は以前より絶えず尾行されているような気がしてならかったからだ。
「気をつけた方がいい。何かあったらすぐに僕の携帯に電話してくるんだ」
確かに最近、とても物騒な事件ばかり起こっている。
つい先日も隣町で発砲事件があり、一人死んでいる。

サヤカは笑顔に戻り言った。
「家には頼りないけど番犬がいるから大丈夫かな」
番犬としては不向きな犬だが、何もないよりはましだ。
「ごちそうさま。今晩から台風だ。きちんと戸締まりして寝よう」
僕も笑顔で言う。
サヤカが食器洗いをしている最中、パソコンを開きメール確認する。
前から気になっていたのだが、僕のパソコンには見に覚えのない一つのテキストファイルがかなり階層の深い場所に保存されている。
ウイルスファイルかも知れないと思うと開くことができない。
それに何故だか削除してはいけない気がして、削除せずにそのまま放置している。
メールソフトを立ち上げ、『受信』ボタンを押す。外では風が増々強くなってきており、遠くの車の排気音がよく聞こえてくる。
『5件受信しました』
平均すると一日当たり五、六件のメールが届いている。
今日も同じようにメールマガジンや宣伝メールばかりだ、と思ったら一つだけ見慣れないタイトルが飛び込んできた。
『美しい古都の街を紹介【奈良史跡文化研究室】』

こんなメールが送られてくる覚えはないが・・・・。
先日、奈良史跡文化研究室のホームページを見た時に何か登録したのだろうか。
『本日は興福寺・五重塔のご紹介。東大寺の南に位置するこのお寺は・・・・』
内容はごく一般的なことが書かれていた。最後まで読んでみるがイタズラメールでも無さそうだった。
『・・・・このメールは奈良史跡文化研究室の依頼を受け、株式会社Zが発行しております。配信停止は・・・・。（担当）未下香子』
タントウ、ミシタ・キョウコ・・・・。なんだか忘れられない響きだ。
誰にでもあるのだろう。とても憶えやすい名前や単語。各個人が感じる心地よい響きというのだろうか。
どうやら僕にとってはこの『タントウ、ミシタ・キョウコ』というフレーズが心地よいということなのだろう。
そういえば、坂本晃三から招待を受けていた。今週末にでも行ってみようかと思う。いや、行かなければならないような気がする。
「お風呂できたよ」
サヤカの言葉で我に返った。
同時に、遠くの方で救急車のサイレンが鳴っている。

「・・・・台風のときって、強風に乗って遠くの音がこちらまでよく聞こえてくるよね。なんだか不気味だけど、この独特の雰囲気がいかにも台風って感じで・・・・。なんだかおかしいけど少しだけテンションが上がる気がしないかな？」

僕だけだろうか。

何かが起ころうとするときのドキドキ感と、何かが起こっても自分達は安全な場所におり、傍観者となれるであろう優越感が湧き出てくるという勘違い。

「そうよね。実は私もそういう感じ分かるような気がする。よく似た感じで、中学の文化祭で全生徒が薄暗い体育館でお決まりの演劇を見たりするときにもそんな感じがする。私って変かな」

サヤカは言った。僕にはその感じが分かる。

今日はもう授業が無いという開放感、それに薄暗い体育館という滅多に無い環境でテンションが上がるのだろう。ましてやそれが土曜なら最高だ。（当時の学校は週休二日ではない）

学校が午前中の半日であることと、明日は休みだということが重なりまさに興奮状態の渦となる。

「いや、変じゃない。僕にもその気持ちがよく分かるさ」

二人で笑いながらお風呂へと向かった。

続く